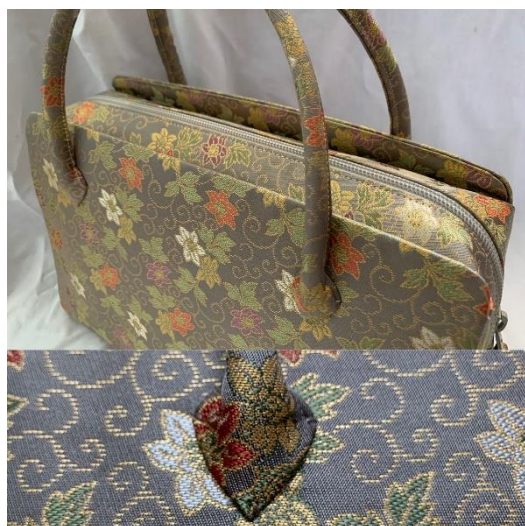




2020年（令和2年）8月20日 // 木曜日 // 第4号

プレジール通信

“プレジールのいま”を（不）定期的にお伝えします。



弊社製利休バッグは「持ち手3点留め」が特長



職人による口金バッグの制作風景

和装のいま！

この「コロナ禍」は、一生を通じて印象深く刻まれる期間になる事は間違いありません。皆さまも、それぞれのお立場で同じような事をお思いかも知れません。

いま、和装は、もはや「普段着」ではなく、観劇、お稽古、冠婚葬祭、成人式、七五三、園遊会、お祭り、花火…、浴衣も含め、これらの特別なシーンで着飾る際の特別なアイテムとなっています。しかしながら、今年は着物（浴衣）を着て出掛ける場面が一切ない、と言う声も頂いています。

今や、海外でも作られている着物は、その多くが分業制で作られます。しかし、需要が無ければ、制作も出来ません。このような状況が長期間にわたると、これを機に着物制作に携わっておられる方々が「そろそろ潮時かなあ」と言う決断をしてしまう事も起こりえるでしょう。そもそも職人の世界は超高齢化が急速に進んでいます。

では、「和装の未来は…?」。バッグも含め、残念ながらその明るいイメージを僕はまだ上手く描けていません。今年に入り、着物や日本の工芸にフューチャーした展覧会が多くの美術館で開催されているのは、今夏行われるはずだった東京五輪に合わせて訪日される方々に向けて企画されたものだった事は自明です。

勿論、目下、これらの展覧会を訪れているのはほぼ日本人ですが、売店を覗いてみても、和装を身近に楽しめるアイテムなどはほとんど見当たりません。間違いなく、「これで良いのか!」と思わざるを得ない、そんな大きな岐路に立たされているのかも知れません。

和装の明るい未来

和装バッグの制作に関わる者として、どうすれば和装にスポットライトが当たるのか?と、いつも考えています。

僕の祖父（弊社創業者、梅澤保）が生み出した利休バッグ（蓬菜バッグ）ですが、近年制作する機会がめっきり減っていました。

ところが、昨年あたりから制作依頼が徐々に増え始め、初めてお目に掛かった方と立て続けに打合せをさせて頂く機会もありました。その度に、「利休バッグの素晴らしさをもっと伝えたい!」と言う想いを強く持つようになっていきます。

「こんなに軽くて、持ちやすいバッグは無い」とお褒め頂くと、「元祖」ゆえに大変嬉しく思います。一方で、あまりにも定番的なバッグとなってしまい、「利休バッグなんて嫌!」と言う根強いお声があるのも事実です。

利休バッグは①表生地、②裏生地、③チャックからマチに掛けての生地を組み合わせで作りますが、素材が変われば見え方は確実に変わります。チャックはプラスチック製のものを使う事が主流ですが、金属製のチャックも使えます。

弊社の利休バッグは、6種類あるサイズからお選び頂けますが、そのサイズ自体を新しいサイズに変更する事も可能です。

「利休バッグは大きいサイズと中くらいのサイズしかないのでは?」とお思いの方も少なくありませんが、そんな事はありません。素材やサイズを新たなものとする事で、「利休バッグ」の可能性は無限に広がるのです。

以前、利休バッグをお買い求め下さったイスの方は、自宅のリビングにディスプレイとして飾って下さっています。

ある日本人の方は使用する素材に究極的にこだわって、和装のみならず、ドレスにも合わせて使う事が出来る利休バッグの制作を依頼して下さいました。

そもそも利休バッグは和装でしか使えない、と言う固定観念のあった僕にとっては、その概念が根底から覆されるような衝撃的で斬新な発想で、出来上がったバッグはまさにドレスで持てる利休バッグとなりました。

思えば、祖父発祥、日本発祥のバッグである利休バッグは、欧米発祥のバッグ界の中にあって稀有な存在です。この辺りを糸口に色々探り始めている昨今。是非、お取引させて頂いている皆さまのアイデアやお力添えも頂いて、どんどん「和装」を盛り上げて行きたいと考えています。

どうぞ宜しくお願い致します。